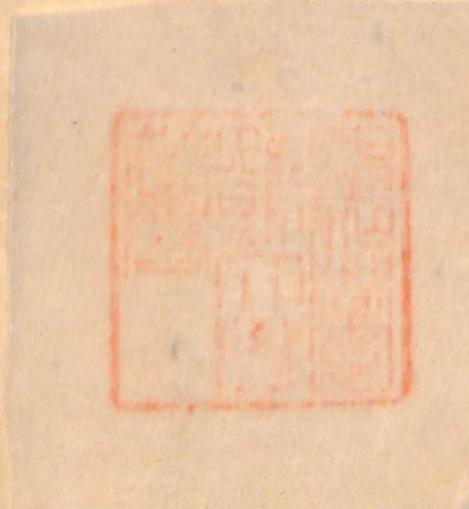


色菴の言人全集





おおきう天明六年纪秋の栗津義仲に傳る
行風はゆせやくこゑ國より寧所もれつを
わう家ア旅やくらはあほ承、くるふそきア什物の
ササ芭蕉翁の雑記とのまなと同様の言葉
まほ様の本乃杖あり二のたからきとみ立せれ門人若
筆をあつをもわりと、うかふす来ハ唐丸男の
かお太冲も大和のゆよまれをうらうとかひがす

えりもつまく見え方ばへゆりよそがまくあらわの筆
写て又筆をひかねば筆もあらわの筆とし
こは夏のやうに下すてれど秋あらわとらむ筆
皆名前を古人からその言ふて今せむとさうと
いふて筆をとれ筆の端をとらむとらむのじへんと
ゆづく地より落つてあもしはな経城乃名筆
ときれ道の玉寶と云ふす(かきるものを抜のと
にえつと人づるをきよまほす筆と

筑前の國飯塚のうすらなる

信弓

蓋起

10 狩山也一牛を小作を

遠近すと餅持九里松

掛舟と岸邊の曹連くさ

風いゆと伸すと之毛月九

燎原煙草市とゆきよ

萬千疋よ燐火よより之

其庵ノ有け成宿舟て九

風氣れぬ野村の夜の聲

月燒火板打トシム私語之

卷之三

詩うたはま波あもれ

1 晴神ト舞シ巒川墨

九
氣比佐^{シトヲ}ノ御塔比^{シテ}ム

九
大薦^{シテ}のちふ童リニ奈美耶^{ナメヤ}許

九
風^{シテ}の煙比^{シテ}鬼^{ワナ}と越^{シテ}至^シ

九
窟^{シテ}うく包^{シテ}隣^{シテ}の巣^{シテ}あれ

九
氣^{シテ}よが堂^{シテ}よね事^{シテ}まづせ洋^{シテ}

脇^{シテ}ぬる妹^{シテ}、男^{シテ}清^{シテ}なり、

東北^{シテ}通^{シテ}れおの^{シテ}事^{シテ}みも

付^{シテ}やうゆうりう、

9 袖^{シテ}事^{シテ}一^{シテ}北^{シテ}の^{シテ}通^{シテ}て

九
氣
吹
き
ま
ま
く

名
利
通
ふ
是
代
所
比
塵
く
く

紅
葉
戸
細
明
鏡
片
許

風
比
草
木
柿
柿
枝
全

れ
れ
れ
れ
れ
れ
れ

17年工績本

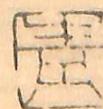
備
湯
火
春
燒
火
產
し
れ
り
、

沟
音
笠
火
原
小
さ
づ
き
全

二十日

内也。七

吉陽邑志考枕あつ



もじやせりひ

秋月夜の霜ノ下
蟬吟

の上

えふゆきをもい野のむかまくわゆ

御元より書はゆりけ藤堂氏筆

依重堂寄湘湖雨

義仲寺

禪古經題

一枚

孫九古歌經題

一枚

老莊點歌仙

一毛

古

應堂氏應堂良鈞

同家父之子の歌とむの歌題

家乃夫や又子れをじよりあひ
其まうみで、もみを注ぐる
いに聖毛あわゆせづんが歌
未

和教

升也之来 郡 绍君

家 附 纷毛

老 裕 灯 户

也 乃 有 执 手
也 乃 有 执 手

候

秋事也

繫船蘆荻間篷

底睡眠開林葉
逐風到良疑雨
出山直愚虫

蕉翁參禪之師佛頂和尚詩偈

同引導之僧直愚上人詩偈

寄附主義仲寺門前住人若山應澄

上卷

卷之三

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

首
多
才
才

翁舍兄書卷之三
安承子十月寄附
伊賀淳流

七日。 晴。

元年正月一日
はまくわらわくわく
けくわくわくわく
月日月日月日
一月一日月日月日
月日月日月日
月日月日月日

七日。 晴。
而のみをめり、
まきをめり、
みをめり、
しをめり、
かをめり、
一月一日月日
而のみをめり、

主之書也。不其美哉。
之書也。不其美哉。

古

ひよけり
在在在蝶
在在

古
消息
通

移體
経典
通

移體之經人
移體而經無習
字

大
小
事
事
事
事

古

雪芝志讀

伊賀上野守度吾川井辨



先師の懷舊

ゆめを枯枝をかたやうりて不返の
連下つまよアリ二十七年
とせんの花もよしとす
すくすすらかくはいへりこゑ
すのふゞとせん年
みみう令仰歌のすとよし
おまゆるすとえんたま
いもぢうあきゆくひ
しんまぢみて歎枯葉
そぞとよのとまかくしゆく

河のつるよじるよしら
をしきれど

山羊

聖文正義筆法

伊勢城下

山岸棟安が書

けらむわすれお墨跡方
ウタシモミテ元のふかたはる
國ニテアリ外記アリ
店ノミ志ムナキアリ
一仕と殊様房下火と唐邊
會をあゆみて出来日吉良
之子仕事もあがむ一延
白毛翁也原作也
三方仕事も有りもんと
ひきぬきの事多もんと

切し手に筆走り以て
丸くして二物とぞ玉引
筆走りとぞ

ナカニ

土方檢

研力

豪爽句

ちかやうめまくもゆくの芭蕉
さくはる まつみ 桜
え袖を一枝

百歲子^{シテ}_{シテ} 何^{シテ}_{シテ} 寓^{シテ}_{シテ} 通^{シテ}_{シテ}

うきあくよ。床^{シテ} ねとう
くまとくもん、
毒^{シテ} 麻^{シテ} 罫^{シテ} 花^{シテ}
絶^{シテ} 白花^{シテ} し^{シテ} 次^{シテ} 自^{シテ} 朝^{シテ} 露^{シテ}
と^{シテ} 古^{シテ} まよ^{シテ} すす^{シテ}
お^{シテ} 良^{シテ} も^{シテ} お^{シテ} う^{シテ} 雄^{シテ} 雞^{シテ}

走

雪舟文政ノ詩集

伊湯 清氏著

初めやせとほのまのう

白雲

揚波より走風、寒
空小止^トきを季年附行

曾祖文吉サ模筆跡

田中長英寄附

筆附

吉次経典稿故

祖父槐市筆跡

仲陽城下
中尾加風

後乃所可^シ候^シ候乃葉川 庚

山家^シの清行やかまし

尾頭^シ頃^シ寄附

佐智上原

十束一升



芭蕉翁又

乞木

又

村穀
式立
カ

久木華 曹孫
半枝仙句題詩
烏文寄附

拾取

芭
まを油り野
病氣と氣稟力ノ體前
れ日あらかじめ此身
萬力煙之の多之の志と左
制書あらざるをも序を穀われ考

湖の長身と見しるべ
筋抗力（シテ）の弱さぬを也
お接よしよりて手すりの
ゆるけら舟内一、のみ
跡（シテ）もあらむかの壁の裏
馬力（シテ）は強度

筋抗力
の弱さ
ぬを也

さへ右足で擣（タケル）ひう
獨歩（ハタチ）力少くもあたへやとと
筋抗力と也とさへあわ
が煙（スモーク）ととててもよ（カニ）
煙草のうるはるに
煙草のうるはるに
（スモーク）ととててもよ（カニ）
煙草のうるはるに
煙草のうるはるに

力に力、元に雨露はさす
紀に草や、望力、水の氣と
能乃多力相えの如き、
力をもつて、人をもつて、
手をもつて、おもつて、手をもつて、
神ももつて、佛ももつて、
天ももつて、地ももつて、

七

士代に傳ひ、後二傳の間で
書風が變り、筆はさらばれ
て、筆の運びも、字の形も、
だんだんと、その時代の書風
に近づいてゐる。それで、
この時代の書風を、この本の
書風と見なすのが、最もよ
い。それで、筆の運びと字の形
を、この時代の書風の範囲
内に取扱ふことにする。

右暴風卷一策元祿七年甲戌之秋阿翁在伊賀村猿雖宅同諸子賦之淨盡者卓袋書之而今日昔集業既載焉烏乎此物也翁既滅之辭而俳諧之遺教經也於是乎雖之家相傳以為祕寶今茲曾孫相而于疾病矣乃謂負道曰凡天下之物常傳于嗜者而亡于小嗜者矣未知余死後歸于誰家也遂屬負道以藏于湖南義仲寺云

天明壬寅十月十二日

蝶夢幻阿識

昔雅波の浦

の夫婦す三

行きゆせひよひよひひーく
ハニラトニシキの屋のある
人きに事とまよあひとしもまは
生ちんとつまえ向て賊とついで
あきぐとのアリのそ紳ハ子のまど
さうひきの月りわくまへやくと

ちきくよからひ、ナニカ唐のゆ
そつけ仰かは男ハやま仰さる情
力なまよあとがり仰かほんと
洞くえ

モウテアガリあらすじす
ワタリサムはの浦ハ行さ
モウカハサレあくきみく
いづる雅波の浦ハ行さ

うへてゆくあまよゆきまの
つきのゆきのとくまのと
くゆくやま

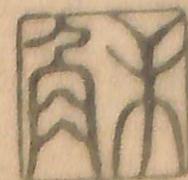
丈草禪師手跡此書功
寄附
湖南青肯

ま
と
め
い
ゆ
わ

尚白曾孫
江左車寄附

秦
那
角上
真跡

西湖區本福寺
曾孫蒲齋居士



牛乃事

ちりよし

うもじ

走
角上

燒
鶴
火
照
火

枯節
郭

松林不化哉せや雲乃

岩城村とひふかく船トノをあきうき
川流中多の村とせもくりんもむちか
ひまみかにまく男たちもあと何まは
波那み山の小舟のる事

餘嶋（すしま）すらぬみ進て船を被つまと網をまび
某後水すら漁者も有れ給ひ乃奇は下
あかり川流をつゝ推そ利と魚をあまゆ
ちりふ乃鷺負（アヒル）舟もくがくもく一風う

車をうらも

よしよの浮舟所一船をあり
水舟を遙て乃海路ひづるをまゆ
らうづるのうるの二谷を仲ゆそ
二谷えてうら波日月秋のうせ

竹青堂正秀の田縁よりあゆ

毛利一と寄附也

湖南栗浦松本

種子庵

簡

あちこちえ

ゆう



ち
月

秋乃とも瑞不ふつや持花乙列

智月画譜 りきそくいほ
し川短冊 欽乃

西朱津可風含牛
江雨寄附

作らるるをしにあはれ
感想あるゆきのまへて
りとまろ、おもつねにす
うかへり、かくまゆる
白きよしめのまゆる
うららかにまゆるがゆる
まゆるへはゆるがゆる
ほひて野ばう帳をか
せちりはむきしきあは
うめらむへまゆるがゆる

奉納酒堂珍碩筆跡

湖南松鴻菴巨洲



かふと風をくう
肇き一もりゆきを
ゆづれ江東を渡り旅よ新入公をよ
振舞ひの旅をとすて
本日即
友村

淨 あ良家の宿徒を

のを すとを毒伊 ち

光ひきのやうへまろ

さーい けふくわ
くわき

法 まよせ

はるひの後 園よ華

すみ庄 まこもと

おれよもよひ 諸事

のつゝみ

見まわ

おもむきそつまみ 神之
免

千時元禄七年

皇平年乃日

法雨院瑞印

印

路通文章一篇
唯泉寺魯江寄附

歲暮

まそりとく出でじます

墨房

昌房年譜
昌房著
殘画寫
嘉附

寄至新嘉爾

此身何處可消愁
久病呻吟心已老
時時自笑無人識
誰知我有故人來
那知我有故人來

新嘉爾

舊居翠華物

辛未立秋平子孫

安其華稿母

名取人已老之風雨
多悲以之愁麻紗

其香



多

一
如



蕉香筆

又人考
之又之八

國子山舊菴額寫

三字

湖南福田五來寄附

三

一弓弓一弓也

弓弓

一弓弓のこ

弓弓

ちかくまよれを角りしゆくわら

ウツルウツル

江戸と京

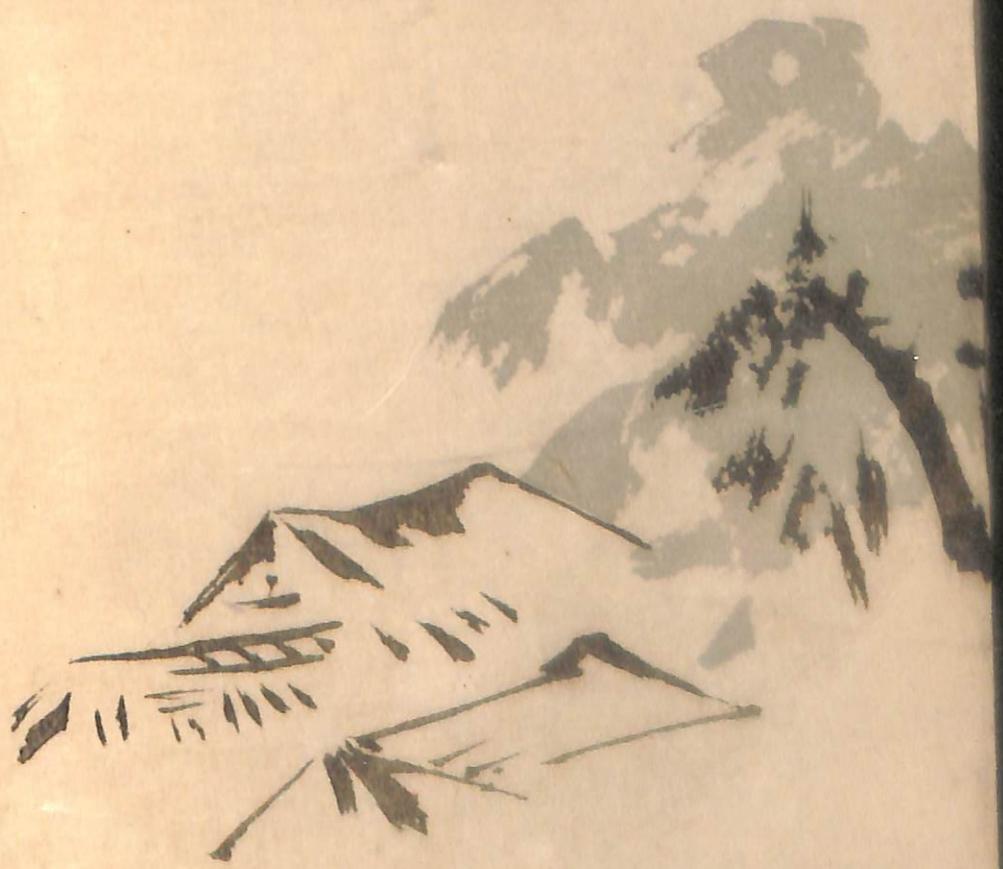
東屋市と西屋

また圓ふらひきき

糸津藩州寄附

王老戎雜





金
華
山

詩六山水之画

寄附湖東

あ毛衣の毛を
毛衣の毛をあ

四釋序短冊

安永十辛丑正月寄附

三

嫡孫木卯印

腕八や少傳下毛耳乃源木尊

木導 埋火短冊 寄附

湖東土田住人曾我塘里

うよきめかすよをもややするは背

葉のあくともひけん足のあく角

むくひ日あはてせせくらのと

説くよきよみみわすちすけ

よくよくそれなこそーあすながつ

みまぬともうまくいとくす

あうりす

免てたるや里め一本もおれがそむ 本堂

五位のあくまくよ文也 五位川 江村

奉納

江村

に品川瀬

龍塞集之内

野村正光

まよ

ひるのまね

あゆけも郭も

御中玉と

御中玉と

り柳人さう

らむしらじゆ

うめとよとよと

よとよとよと

やくへもかわらふよ、やまの
りあらうちくにゆき以て、おのれの轟極と
ひきぬけまつて、ゆきのむらをひきぬいて、
わざまつて、まものえおさすまつて、
うつしゆくよほくねてもや
くろい、ゆくよほくねてもや
木、まきれおちよ早はづもくそ
さくわく、みくらんもくして、か隣
せき隣のゆ裏にふむねづくを
ゆくゆく、ほづゆまふる憎ね
くらひきん、妹育のゆくゆく、
くらもやくすくもじに怪しきとある

ゆゑあつて、おとこけうよ
ちくよくすとおなよゆあわせ
梅よくれおとよもかくゆよむせ
うれりおもよくよとゆよせ

狮子老人真筆

足井遺史櫟君里寄附



鶯羽

白ぬよとひよけり 始馬左上
はづちを日のすみる御鳥
やく、門を敲て袖て若き時
は友の勧め事かへがもひき惣襟詠
かくし柏木、よろすと松葉は
春まゆ自徒下尾を照り
ゆひあると若緑吹きに

我と密みれうよの心玉左上
旅泊乃翁を休す
この柱才とくりてアヒ貢
多め左和田の園散るよ甚板
風吹喟きよのよ

冷々威き小葉玉品乃所端を
ほんて思ひよのよのよ

裸身よ吹きてす
桜色

住吉御稿

四

被ひか葉舟よ

江東柳原乃直侍
心乃方ノシカレ風色の
せりのむすめ
約草乃がむじゆのせりよ
せりゆふひつを海玉あはと
波音の白浪のまよ身波は
わ葉をのうかくかくよる
かくかく波は馬御行
かくかく船は馬御行

五

アラマサ
アラマサ
アラマサ

如行真蹟羈行一枚
美濃赤坂竹中蘭戸寄附

十六年

十六年正月一清早と
前

七夕

糸乞

はなを春に上よりひひ

名

名や年あてての戸

ゆくよ。うれむに
はなはひそめす。一
年もひよ。御名す
りのまよせじ。

松葉や。拿事も
とわらずす。松宿局

所

美空集



日あれば
春の來る

はな

郭公
向底カタシ

十六夜ジヂヤ

前口

古アガ
名月ナツヅキ

斜氣

松草マツコ

子川

芋イモ
北条ヒサシ

比節

郭

公

濃別植柳下
久世高庸寄附

和家カハ
北流カヒラ
程カミ
人ヒト
不ハ

進門月空庵露川居士墨跡寄附

江別芭蕉堂

尾次佐屋次白淹寄附

仕合のまゝやとひうい聖人

中川

三月のよはくの菊

中川

むよにせ我面向て食毛ノ
眼をそよす陽炎の 瘦一晶

夜帝て其の鷲々を悟ルシ
童子孫をすれ 唐梅其首

董門越人墨迹奉納江州芭蕉堂

尾列佐屋次旭天合寄潮

拂ひぬるもまのづかふ

先師花や柳の小まみれの風

白雲

金刀道瑞よりもむらに
識

高祖知足又號寐照曾祖風和又號蝶羽祖鉄叟
又號龜世皆親受其蕉翁之教沂風師來需手澤
因北藏諸家仲寺裡芭蕉堂
天明三年癸卯春三月 噉海學海識



七十にしてひづかの里の古道とひづ
後寢のとのうをかしててすくノ聲

蓬萊のそとやあじ度すり 白雲

白雲筆

蓬萊農句

白雲末孫玄何新城太田芦帆本納立

今未聞之革也何敢辭耶遂連奏一曲也其歌專雅鑠金石繁
焉盛舞伏伏曰難等是貴命難得是明時臣遇此命古
少翁內府北山游宴歌一曲雜眾舞也今日為我壯歌
削古地曾命曰盛父者平家世臣武略達人歌舞名客也往從侍於
清水寺邊來教勿患矣幕下亦同夜向同臺故許允貞所
傳本詩散信我有年焉其功豈空半今為汝自洛陽東山
事君之微將劍首前夜臺上老僧持水唱念珠携
盛久早者其事哉或當寄詩永紀盛

國

詩

李吉田五味齋集

聞其音清妙山堂

廿八年正月廿二日

榮賀幕下廷齡以爲盛矣嗚吁甚哉人之好怪觀者若始以
夢勸無道行幕下者信怪夢裸不忠臣盛者有怪夢秉於
共不戴天讐世人者奇怪夢玩不善章何決如此於是兼時正襟危
坐告曰爾盛久聞我言於泉下爾友必有^有七衛尉景清者義勇刀
敢無敵者然平軍大敗卒將已囚景清獨欲復讐^{深懶不全}諸如於
所在源軍^{開其臂}因其臂^{自代}其舅弟景清聞自見伏罪下獄嘗信清水寺觀也
者觀音憐其忠孝共合力使景清破獄脫去而以來或名灰為呵
婆身為癩或微服潛行窺幕下於南都及鎌倉數謀數露再
為源軍捕^然幕下亦感其忠信^不加刑也景清^{雖未盡}術既來
無如何焉憎目徒見於源氏自為盲去平向州又同友有瀨尾太郎
兼安者平家征木曾日赴干北越為倉光二郎成澄捕木曾識
兼安者平家征木曾日赴干北越為倉光二郎成澄捕木曾識

其勇士許為臣瀨尾伴諾兵後年木曾伐平家於山陽兼安請
為先登到備前州先殺成澄弟三郎成氏忽亟于平家驅衆回臣及
三備之軍卒支木曾兵於條迫戰成澄於板倉川得其首異
而后軍敗走于備中州兼安聞嫡子小太郎宗安未及面馬父
子戰死^於場^於其慈亦可則焉又有源廷尉義經妾靜者
廷尉赴^于奥羽之後因寓于鎌倉幕下之近臣梶原三郎景茂設酒
者尉^以靜於旅館密通艷言靜忿怒涕泣辱景茂失靜元
有歌舞名幕下欲見之教召不應幕下夫人重令靜鶴
舞^見鎌倉之諸候^{不可}太^以士庶人無不^到見者^一靜敢不恐懼^其上^基
^舞^且^歌^一章^一章悲廷尉沉淪一章兼廷尉離別而不^不鎌倉

繫榮幕下大怒垂幕不見衆人皆懼。靜當富利兵夫人
為謝曰昔日大君戰平軍於土肥相山。君軍不漂於總房。
時⁸姦⁹通¹⁰時¹¹姦¹²遁在十足柄山其慙¹³与彼獨燃¹⁴請勿罪焉¹⁵其忠心¹⁶
貞操¹⁷可見矣不如而已鉢木三郎重家者欺赴¹⁸高館伊藤九¹⁹
郎祐清者辭²⁰于京帥共得其死然²¹是教人者爾同也²²
也²³咨爾幸免死何不習義於景清忍為臣何不習謀於
兼安不得已歌何不習章於靜²⁴乎²⁵靜者岐女况於武²⁶
耶重家者一旦臣²⁷覩²⁸於世臣²⁹於爾與³⁰何誅已而評曰鞠³¹
育及幕下所救³²背忠信³³之人而如盛久³⁴倭奸者也或曰善³⁵
惡平等不淺於一切衆生是佛慈³⁶也觀音³⁷豈無救盛夕³⁸

乎答曰然我聞之佛³⁹遵⁴⁰惡而敵善未聞助不善而增惡者
觀音何為⁴¹赦焉又考東鑑及源平軍記平家臣⁴²主馬判
官盛久別有主馬判官盛遠而無其事也此知後人謬作
矣作之者何人乎此之可謂真盛久而已

洛東逸民向井二郎藤原兼時書

玄末志跡益久傳重厚芳附

凡北

手、丹八

いぢづや

こちる

ナレタシ

九把色紙 捷舟

李貫氏家質取やま 豊後
色紙當事の支割

弓箭

日向毛其事すよ聞也

淹紙

書未定題及行印一枚
持はま若井より承

弓箭

其名所は先師もさうほどの
御事には御座りて
うるそとは見えぬ所皆
まことに御座りたる所の
事は御坐りて御事には
御事には御事には
御事には御事には
御事には御事には

御事には御事には
御事には御事には
御事には御事には

居

其事

うるそとは見えぬ所皆

其名所は先師もさうほどの

おやおとあわせちをいものまみのうたをかくはる
およこどちねどくとくへだ高二川育りつゝう
あよゆぬあよくとくにむくらむれぞひきえりゆ
のくとくうのまうもあとくふとゆむとくむあれ
ちをすくとくのとくとくとくとくとくとくとく

曾良賢翁宗臣居士墨痕弓法和歌立首

施主信判詣訪住人宮坂自德寄進

吉羅画譜
浪花大作四國納
印

まよ



さゆも



まやふき
やの

何
事
也
其
他

梅花佛惟琰師筆
寄附
播府丹頂


卷之三
行草书
上
王羲之
右军书
行草书

寄游
神風館涼菴真跡
字佑八懷官
萬學山
補元祐洗利

秋之坊
加賀一菊

加賀
一菊

事幼やなれ小物を紙の世乃手
加賀今後何様小松氏

不笑

加賀金城住小松一笑之末葉

一笑

柳陰軒句空真蹟原爺幻住舊
既白之物而既白先故以故今為義
仲奇之什 平安 雨雲羅

本枯や釣徒也うのうひ

比枯ゆる例

本枯や片くもすうひ

叶ぬ

浪菴公木枯眞跡
其角評 越中蟹卧寄附



藻の毛

金魚よ

ひらひら

甘の角

栗津義仲寺住持沂風上人廣菴分蕉翁門
下諸子手蹟集而裝之長為寺中寶余亦
捨家藏其角書一紙以充其數

武藏夏成美書



山茶花下小舟
綠葉紅花映水舟行
竹簾戶上圓缺月
一日一夕石室
多雨林木生雲氣
八雷

古風書中龜山風雪之景
日次善稿生處

三無言中龜

卷太



ゆゑの風物記　あはくとお附
式が河越

百鬼夜行

玉の鏡



うし肥は
船内

草魚

船内

卷之三

放逐

松風

松風自筆尾形和之吟納

戒仲寺
安承八年
今松風



松風漫集

草书

金

編

一書

嵐

金

麻姑酒

一樽

史邦

列傳十九世孫之子也

望

六月日

史邦

李商
蘇大
文獻

史邦筆之稿

湖東葛竹施町

引牛

モリノミサトと
からうの元すまうも
りりひもあみよも
トコムぬかやむを
タクスモウタクとの
よす。ぬすと、と
とす。

トドモシキヒカイ
スラツヒトドモスル
ヒセヨアマセホ
ミサセサヌミ
カタシキヤモハ
リヒヨリシテルヒ

喜多川

高室

詠
桂
花

金
華

園女更き
いつまよて空樓を
寄附

江都深川住

松本古友

桂合小

尾八重
桂
花

牧

鉛
短冊

尾八重
桂
花

江都深川住

橋本泰里

枯木涼秋物外局

遊龍化蝶舞

薄中盛嘗侍子葉

東家子之辭下，識人知

卷之三

本·星未

武藏淺草 夏陽子寄附

十七
麻魚ノ穴ノ外モアリ
洞露作

内藤下野守政榮

遊園堂露沾短冊

露草

寄附

奥書

芭蕉翁遷化ありて俳諧の匠はきたり既は
九十年の春秋を歷ねまし、今れ時も俳道の
像はの時よりもやゝ年老ひ芭翁の寫瓶
傳燈乃門人トシトモをとの叢向の夢ト
やまとて筆端も見るに過ぎなり當や今も
すゑつまし一枝參む好む所行とく

もの立事う名あよハみそのをとあくせ年舟もろを
つうてまた芭翁のうまき絶ひ、伊賀の國の
藤堂家をもとめ體どうづく近にのいた伊勢
の屋彌ノ行脚のゆづるあるまつらが藏むらう
まゝ、ものふねば家うるハ弟の嗣をくわゆまき筆
の詒をかとぞく寄附さめ申され付物とく
後生人子とて又お算支ふ達と見ひたまし、じがき

じまに住持の傍へもつておまき出でるものや

一石一木をもとりになさん。佳子弟にあらへし

まあ、これのまゝ老齋あんとこまへば

天明二年寅十月時兩會於義仲寺芭蕉堂前

蝶夢幻阿弥陀佛謹誌



寛政元年己酉春發行

栗津義仲寺藏

井筒屋庄兵衛

橋屋治兵衛

皇都書林

同 儀兵衛

